



The Excursions of
Mr. Brouček
VOL. 1

レオシュ・ヤナーチェクの見たと「ブラハ」
オペラ『ブrouček氏の旅行』の世界

阿部賢一 (武蔵大学准教授・中欧文化論)

「黄金の都」とも称されるブラハには、人を惹きつける磁力のようなものがある。外国の人々は言うまでもなく、チェコの地方に住む人々にとっても、ブラハは憧れの場所となっている。東モラヴィアのフクヴァルディ(現・チェコ共和国)という小さな町で生まれたレオシュ・ヤナーチェク(1854~1928)もまた、この都市の魅力にはあらがえなかった。ローカルな文化を大切にしながら独創的な作品を世に問うたヤナーチェクはモラヴィア地方の中心都市ブルノで生涯の大半を過ごしたにもかかわらず、ことある毎に文化的な中心地ブラハでの活躍に憧れていた。代表作『イエヌーフ』が1904年にブルノで初演されてから、ブラハでの上演にこぎつけるまで要した年月は12年。それでも、ヤナーチェクは自分の作品がブラハで初演を迎えることを切望していた。

幸いにも、『イエヌーフ』が成功したことを受けて、ヤナーチェクにとって5作目のオペラとなる『ブrouček氏の旅行』が、1920年4月23日、念願のブラハ国民劇場で初演される(ヤナーチェクのオペラのなかで、ブラハで初演されたのは本作のみ)。だが公演前には、居酒屋の主人ヴェルフル役のバリトン歌手が「こんな金切り声をあげたら、声が台無しになる」と言い出すなどして物議をかもし、初演後の批評も芳しくなく、結局、ブラハでの上演は9回を数えるのみだった。『ブrouček氏』もまた、ヤナーチェクの「早すぎた想像力」のために、当時のブラハの人々に理解されなかったのだ。

不評を買った理由はどこにあったのだろうか。だが、その前に『ブrouček氏の旅行』の概要を説明しよう。二部から成るこのオペラを端的に表現するなら、『SFコメディ・オペラ』となるだろう。主人公のブrouček氏が第一部では月に行き、第二部では15世紀のブラハにタイムスリップするという奇想天外な物語だ。「ブrouček氏の月旅行」と題された第一部の大半は文字通り「月」で繰り返される。1888年、ブラハ城近くの居酒屋ヴィカールカでいい気分になって千鳥足で歩いているブrouček氏の身体がふわふわと浮かび上がっていく。意識を取り戻したブrouček氏がたどりついたのは、なんと「月」だった。しかも月面で遭遇するのは、食べることも飲むことも忘れて、芸術に没頭する月の住民ばかり。ブrouček氏は愛想をつかして、ついにはペガサスに乗って月を去っていく。第二部の「ブrouček氏の15世紀への旅行」では、今度は1420年のブラハにタイムスリップしてしまう。ブrouček氏が迷い込んだのは、神聖ローマ帝国の軍隊を中心としたカトリック勢とチェコ系住民を中心としたフス派とのあいだでの歴史的な一戦の最中だった。戦いに巻き込まれたブrouček氏は臆病にも逃げ出し、しまいには樽詰めの刑に処せられる。だが気がつくと、19世紀末のブラハの居酒屋のなかの樽に戻っていて、無事、帰還を喜ぶというハチャメチャな物語である。

だがこの作品には、単なる『SFコメディ』という枠組みにとどまらない、痛烈な風刺の精神が流れている。風刺の対象となっているのが、同時代のチェコの人々、特にブラハの人々だった。ちょっとした財産を持つ地主のブrouček氏が第一部で遭遇するのは「月の住民」だが、じつはこれらの人々は当時のブラハの芸術家や文化人を念頭に置いている。作品の舞台

設定は、作家スヴァトブルク・チェフ(1846~1908)による原作が刊行されたのと同じ年の1888年。その頃のブラハはオーストリア=ハンガリー二重帝国の一地方都市に過ぎなかった。チェコ系住民は権利拡大を求めて、ドイツ系住民との間で対立を深めていたのだが、なかには自文化の優越性を唱えるチェコ系の文化人や芸術家たちもいた。作家チェフは、チェコ語の通じる世界という非常に小さな世界で微に入り細を穿った議論を繰り返すそのような芸術家を「月の住民」という設定に置き換え、痛烈な風刺を展開しているのである。

15世紀にタイムスリップした第二部では、ブrouček氏がドイツ語に由来する口語表現をついつい使ってしまう、敵軍のスパイと勘違いされてしまう。そればかりか、戦闘が始まると、ブrouček氏はドイツ語で相手に呼びかけ、「自分はブラハの人間でも、フス派の人間でもないんだ」と命乞いをする。じつはその相手はフス派のチェコ系の人々で、ブrouček氏は臆病者と見なされて樽詰めの刑に処されるのだが、無事19世紀末のブラハに戻ると、今度は何もなかったかのように「わしがブラハを救ったんだ」と豪語する。このように、このオペラはチェコ文化の中心にいる(けれどもあまり地方のことを顧みようとしない)ブラハの人々を揶揄する側面があったのである。そのため、当時のブラハの人々にはあまり歓迎されなかったのだろう。

この『ブrouček氏』はヤナーチェクのオペラの中でも特異な位置を占めている。というのも、モラヴィアの言葉や旋律を愛したヤナーチェクの中で珍しいことにブラハが主たる舞台であるばかりか、主人公もブラハ出身であり、舞台設定も、第一・二部の冒頭と最後にブrouček氏が姿を見せるのはブラハ城のすぐ近くにある居酒屋ヴィカールカといった具合に、ブラハの色彩の濃い作品になっているからだ。そのため、ヤナーチェクの作品に特徴的な豊穡な地域文化が鳴りを潜めているかということ、けっしてそうではない。むしろ、ブラハの文化の多層性を強調する仕掛けがなされている。例えば、月の人たちが話しているのは同じチェコ語でも、なぜか「東ボヘミアの方言」であったり、15世紀のブラハの人々が話すのは当然ながら「古チェコ語」と呼ばれる古いチェコ語であり、空間と時間を隔てられた多層的な言語が用いられている。

作家ミラン・クンデラが「ヤナーチェクは現代芸術の時代でもっとも重要なオペラ美学の創造者である」と述べているように、ヤナーチェクをモラヴィアの民俗音楽と過度に結びつけるべきではないだろう。今年12月、日本で初演を迎える『ブrouček氏』がそのいい例である。今回の公演は、モラヴィアの偉大なる音楽家ヤナーチェクがブラハの言葉をいかに料理しているか、肌で感じ取る最良の機会となるだろう。



「黄金の都」ブラハ

第573回定期演奏会
2009年12月6日(日)6:00p.m.
サントリーホール

ヤナーチェク
オペラ『ブrouček氏の旅行』

第1部 ブrouček氏の月への旅
第2部 ブrouček氏の15世紀への旅
(日本初演、セミ・ステージ形式、チェコ語上演、字幕付)

指揮=飯森範親
演出=マルティン・オタヴァ

- ブrouček
- ヤン・ヴァツィーク(Ten)
- マザル/青空の化身/ベツシーク
- ヤロミール・ノヴォトニー(Ten)
- マーリンカ/エーテル姫/クンカ
- マリア・ハーン(Sop)
- 堂守/月の化身/ドムシーク
- ロマン・ヴォツェル(B.Br.)
- ヴェルフル/魔光大王/役人
- ズデネク・ブレフ(Bass)
- 詩人/雲の化身/スヴァトブルク・チェフ/ヴァツェク
- イジー・クビーク(Br)
- 作曲家/竖琴弾き/金細工師ミロスラフ
- 高橋 淳(Ten)
- 画家/虹の化身/孔雀のヴォイタ
- 羽山晃生(Ten)
- ボーイ/神童/大学生
- 鶴木絵里(Sop)
- ケドルタ
- 押見朋子(Alt)

合唱=東響コーラス 合唱指揮=大井剛史
S¥10,000 A¥8,000 B売切 C売切
TOKYO SYMPHONY チケットセンター
044-520-1511